

## 第33回福島県精神医学会学術大会抄録

日時：2022年2月20日（日） 10:00～14:10

場所：福島県立医科大学 神経精神医学講座【WEB開催】

### 1. 片頭痛と脳波異常を伴った不思議の国のアリス症候群の一例

<sup>1)</sup>福島県立医科大学医学部 神経精神医学講座

<sup>2)</sup>新田目病院

<sup>3)</sup>東北病院

<sup>4)</sup>竹田綜合病院 こころの医療センター

<sup>5)</sup>一陽会病院

<sup>6)</sup>福島県立医科大学医学部 小児科学講座

<sup>7)</sup>福島県立医科大学医学部 脳神経内科学講座

佐藤亜希子<sup>1)</sup>, 板垣俊太郎<sup>1)</sup>, 横倉 俊也<sup>1)2)</sup>

和田 知紘<sup>1)3)</sup>, 赤間 孝洋<sup>1)4)</sup>, 木村 聡<sup>1)5)</sup>

鈴木 雄一<sup>6)</sup>, 松田 希<sup>7)</sup>, 三浦 至<sup>1)</sup>

矢部 博興<sup>1)</sup>

不思議の国のアリス症候群（Alice in Wonderland syndrome: AIWS）はルイス・キャロルの児童文学にちなんで1955年にToddが提唱した、自己身体の変容感を中核症状とし、視空間知覚、時間知覚、聴覚認知などの変容感、離人感などを周辺症状とするものである。EBウイルス感染症、脳幹性前兆を伴う片頭痛、側頭葉てんかんの単純部分発作である錯覚発作などが原因となることが多いが、種々の精神疾患、脳器質疾患でも生じうる。中でも時間感覚の異常はてんかんやADHDなど多くの疾患で出現し、時間感覚を担う脳領域としては大脳基底核、小脳、側頭葉、後頭葉、前部島皮質等が想定されている。一方、原因疾患として多い片頭痛とてんかんは頻度が高く一過性発作性脳疾患であるなど様々な共通性があるが、その関連性は十分に解明されていない。

症例は13歳の女兒。幼少期から時間知覚の変容の体験があり、X-2年から頭痛、X年6月に小人の幻視やフィルターのように景色に色がつく視覚異常が出現。小児科での治療で改善に乏しく、不眠や不登校傾向が続き心因が疑われ、X年10月当科を紹介受診。脳波検査でてんかん性異常（双極誘導で右後側頭部に位相逆転、単極誘導でT6に最大振幅とする鋭波の散発）を認め、MRI（T2, FLAIR）で右後頭部白質に高信号を示す小領域を認めた。脳神経内科と協議の上、てんかん性異常、あるいは片頭痛に基づくAIWSを想定し片頭痛治療に加えて抗てんかん薬投与を行った。また、幻視については

AIWSだけで説明するには明瞭で具体的すぎるため、解離症状による修飾を想定し、家族内力動の聴取と調整を行った。本会では、本症例のAIWSにおける片頭痛及び脳波異常の病態への関与を中心に文献的考察を加えて発表する。

尚、本発表は本学の倫理規定に基づき、プライバシーに関する守秘義務を遵守し匿名性の保持に十分配慮した。

### 2. PLMT 症候群の加療中に複雑性幻聴を生じ、その内容に連動した不随意運動を報告した高齢女性例の脳神経基盤についての考察

<sup>1)</sup>日本赤十字社 福島赤十字病院 精神科

<sup>2)</sup>福島県立医科大学医学部 神経精神医学講座

<sup>3)</sup>東北大学災害科学国際研究所 災害精神医学分野

宍戸 理紗<sup>1)2)</sup>, 國井 泰人<sup>2)3)</sup>, 山本慎之助<sup>1)</sup>

藤森 春生<sup>1)</sup>, 佐藤亜希子<sup>2)</sup>, 板垣俊太郎<sup>2)</sup>

三浦 至<sup>2)</sup>, 矢部 博興<sup>2)</sup>

複雑性幻聴には人の声として認識される言語性幻聴があり、自己所属感の低下によって、自生思考から考想化声、会話形式の幻聴、自身の行動に注釈をする幻聴へと様式が変化すると考えられている。言語性幻聴は統合失調症の診断において重要視されることが多く、高齢者では新規に生じることとは稀とされている。一方、painful legs and moving toes (PLMT) 症候群は、中年期以降の女性に多く発症する、片側または両側の足趾の痛みと不随意運動を伴う稀な疾患であり、原因不明の場合が多く難治性である。今回、PLMTの神経内科治療経過中に、数を数える女の声の幻聴が生じ、その後考想化声へと発展した70代女性の症例を経験した。幻聴は、「女の人が数字を唱える声」として出現し、徐々に数字や単語が脳内で繰り返し反復して聞こえるようになり、さらにその内容に連動して手足や体が勝手に動くようになったという。その後も同症状が続きその対応に難渋した神経内科より精神科紹介となった。当初、晩発性の統合失調症や妄想性障害が鑑別に挙がったが、発症年齢が遅いこと、病識が明瞭であること、幻聴症状が主であること等からそれぞれ否定され、器質性幻覚症として精査を行ったところ、SPECT検査で楔前部の血流低下が認められた。楔前部は、アルツハイマー型認知症の初期に血流が低下することが良く知られているが、他に、alien hand 症候群での非自発的な運動との関連も報告さ

れ、自己主体性に関わる可能性も指摘されている。本例では神経内科より処方されていたアミトリプチリンを中止したところ考想化声の症状は消退した。同薬の副作用に音楽性幻聴や考想化声などの報告があり、本会では楔前部の脳機能や聴覚機能低下との関連を含め、本例における脳神経病態について詳細に検討する予定である。尚、研究報告の同意を本人から得ており、個人情報に関して十分に配慮した。

### 3. 早期の集学的な介入が本人の生活状況の改善に必要と考えられた器質性精神障害の一例

福島県立医科大学医学部 神経精神医学講座

佐々木太士, 刑部 有祐, 一瀬 瑞絵  
大成 晃, 小林 有里, 島村 美帆  
丹治 良, 板垣俊太郎, 三浦 至  
矢部 博興

器質性精神障害は脳腫瘍、脳梗塞、神経変性疾患、脳炎等の脳の器質的疾患を原因として発症する精神障害の一群である。今回、感染性心内膜炎に伴う脳梗塞発症後、集学的な介入が得られず、職場での処遇不良、自宅療養困難に至った器質性パーソナリティ障害の一例を経験したため報告する。

症例は46歳男性。X-17年に初回脳梗塞を発症した。感染性心内膜炎の関与が疑われ神経内科、循環器内科、心臓血管外科等の診療科が関わり、リハビリテーションを経て同年に復職した。当時は作業効率の悪さは見られたが勤務自体は規則的にこなすことが出来ていた。X-3年感染性心内膜炎及び脳梗塞を再発した。再度循環器内科、心臓血管外科にて加療されたが神経内科や脳神経外科、精神科の受診には至らなかった。退院後X-2年頃より仕事での遅刻やトラブルが顕著に増え、X年X-5月には職場同僚と仕事が遅いという理由で口論となり職場から休職を指示された。家庭内でもしばしば父親と口論になり、X-3月にはレスパイト入院の形で当院循環器内科に入院した。その際に精神症状の評価目的に当科を紹介、実行機能障害、注意障害、易怒性が認められ当科でのフォローを開始した。その後身体障害者グループホームへの入居もトラブルにより1ヶ月程度で退去となり、自宅療養も困難であるため社会生活調整目的にX月X日に当院当科に入院した。学会発表では入院後の経過も含め考察を交えて報告する。

本発表は福島県立医科大学の倫理規定に基づき、個人情報の保護に留意し、倫理的配慮を行った。

### 4. コロナ禍による学業継続の断念を契機に抑うつ状態を初発として双極性感情障害を発症した若年症例

福島県立医科大学医学部 神経精神医学講座

島村 美帆, 板垣俊太郎, 長岡 敦子  
佐藤亜希子, 三浦 至, 矢部 博興

児童青年期発症の双極性感情障害は成人期とは異なった非定型的な病像や急速交代型が多く、うつ症状と躁症状が混在する混合性エピソードや、易刺激性、情緒不安定な混乱状態を呈しやすいとされる。今回我々は、環境変化を契機として抑うつ状態を呈したことから適応障害と診断したが、加療中に混合性エピソードを認め、双極性感情障害へと診断を改めた若年症例を経験したので報告する。

症例は16歳女性。X-1年4月、地元から離れ遠方の語学学習に特色のある高校へ進学したが、登校制限により級友との交流がなくなったことや、期待していた交換留学の中止により、徐々に就学意欲が失われ抑うつ状態から社会的ひきこもりとなった。X年4月に当科初診、適応障害と診断しエスシタロプラムによる薬物療法を開始した。同月地元の高校に再入学したが過剰適応となったのちに不登校となり、家族が登校刺激を与えたところ衝動的に過量服薬・自傷行為に至り当院へ救急搬送された。混合状態を呈しているものと考え双極性感情障害と診断を改めて、エスシタロプラムを中止しルラシドンを開始した。その後オンライン授業の通信制高校に編入し安定して経過していたが、家庭内での不和をきっかけにX年11月二度目の過量服薬を行った。その後はルラシドンの主剤とした薬物療法により一定の安定を呈して現在に至る。本発表では本症例の診断および青年期の双極性感情障害におけるルラシドンの有用性について検討する。なお、本発表は福島県立医科大学の倫理規程に基づき、本人から十分なインフォームドコンセントを得てプライバシー保護に配慮して行った。

### 5. 新型コロナウイルス禍における薬物乱用により入院に至った2症例

福島県立医科大学医学部 神経精神医学講座

丹治 良, 刑部 有祐, 一瀬 瑞絵  
大成 晃, 穴戸 理紗, 板垣俊太郎  
三浦 至, 矢部 博興

近年薬物乱用の悪化が問題視されており、新型コロナウイルスの流行も拍車をかけたとみられてい